

「入学前後でためた100万円が底をつきかけている」。早稲田大学2年生の男子学生は上京して一人暮らしを始めたものの、直後に新型コロナウイルスの感染が拡大し、アルバイト先の飲食店は休業が続いた。店はほどなくして閉店。今年始めた居酒屋のバイトも感染がピークとなった夏に辞めた。いまに至るまでバイト収入はゼロだ。生活を切り詰めているが、貯金は30万円ほどに減った。

就職浪人を決めた東京都内の私立大4年の男子学生はバイト探しを始めたが、通学圏内の飲食店の仕事はどれもシフトや時給の条件が合わず、思うような働き口が見つからない。就活対策などで時間の余裕は限られるので過酷なバイトは避けたい。

「いい条件のバイトを知らないか」。友人に会うたびに仕事の紹介を頼む日々が続く。

新型コロナウイルス禍は大学生の生活をむしばんできた。日本学生支援機構によると、感染拡大が始まった2020年



大学院進学を目指す上智大4年の長谷部さんは学内バイトで社会人の学び直しを支える

度の大学生（夜間部除く）の間平均収入額は192万7600円。18年度の前回調査から7万3700円減った。機構は「バイト先が休業し、家庭の経済状況も厳しくなって仕送りにも影響している」と分析する。

感染状況の落ち着きで、全国求人情報協会による10月の求人広告掲載件数は飲食店のホールスタッフなどの「サービス」が前年同月比で3割以上増えた。

ただ、学生に人気のこの業種への求職者の割合は減っている。バイト情報を提供する学生情報センター（京都市）広報室長の寺田律子は「いつ自粛になるか分からない業種は敬遠され、いまはキャリアにつながる仕事が注目されている」と話す。

上智大学4年の長谷部絵莉は3年時、コロナ禍で留学断念を余儀なくされた。新たにバイトを探したが、未経験の業種をこなす余裕はない。そこで始めたのが学内バイトだ。社会人向けのプログラムの会場設営などを担当する。大学院進学を目指すいま、「大学教員と交流したり、学び直す社会人を目にしたりする経験は自分の将来を考える材料になる」という。

立命館大学3年の福岡宙は昨年11月、今年3月、学生情報センターなどが開催した有給のインターンシップに参加した。地域企業の情報発信や市職員との交流を通じ、「コロナ禍で奪われた学生生活の一部を取り戻す有意義な体験だった」と振り返る。福岡はいま、地方公務員になる夢を持つ。（敬称略）